

# 海外に日本の大学の魅力を発信し「横に広げる」研究を

グローバル化時代の教育を研究する北村准教授は、人文社会系を含む全分野の国際共同研究の推進を訴える。

今回のランキング結果では、会津大など特徴ある大学が入っており、日本の大学の多様性を見てもうよい機会になりました。また、地方国公立大が多数ランクインしたことは、教育の質の高さが認められた結果といえます。特に工学・農学のレベルは世界的に高いので、ここに国際感覚と語学力が加われば、さらにプレゼンスを高められるでしょう。

日本の大学の研究・教育システムは、研究に許された圧倒的な自由度、理系の研究室において学部生の頃からチームを組んで科学者を育てるメソッドなど、独自の魅力を持っています。教育方法については国家的に海外への売り出しを図っており、インドやマレーシアで高い関心を呼んでいます。

一方で順位を見ると、中国などアジア各国が上昇している中、日本は相対的に低下しました。中でも順位を落とした東大は、被引用論文のスコアの低さが問題です。実は、東大は評判ランキングだと11位とトップレベルなのです。しかしその内訳は、ほかのアジアの大学と同様、理工系に偏重し、人社系含めどの分野も偏りが無いオックスブリッジなどは異なります。

日本の大学はもっと人社系の研究も海外に発信し、日本の文化、思想のファンを増やすべきです。日本人のものの見方を研究を通じて広めたり、留学生を増やして日本に理解ある人を増やすことは、いわば「知識外交」です。長い目で見れば安全保障面にも効果があると思われます。大学間での健全な競争と協調による研究の推進は、世界平和にも貢献するものとなるでしょう。

このような視点に立つと、日本の大学はランキングにどう対応すべきか？

東京大学大学院  
教育学研究科  
准教授

北村友人

きたむらゆうと ● 1972年生まれ。慶應義塾大学文学部卒業。カリフォルニア大学ロサンゼルス校教育学大学院社会科学・比較教育学科修士課程・博士課程修了。Ph.D.(教育学)。専門は、比較教育学、国際教育開発論。



まず前提として、ランキングは順位ではなく、自学の強み弱みをとらえるものとして冷静に受け止めること。そして分野に偏りなく国際共同研究を進めることです。今、国際共同研究はそれ自体が目的化している傾向にあります。今、国際共同研究はそれ自体が目的化している傾向にあります。今、国際共同研究はそれ自体が目的化している傾向にあります。今、国際共同研究はそれ自体が目的化している傾向にあります。

研究のしかたも課題です。日本は深掘り型の研究は得意ですが、横に広げる研究は不得意でした。そこで、より積極的に領域や分野を広げて共同研究を行うことで、影響力のある研究になるはずですが。

## 100位以内に入ったアジアの大学の分野別スコア

順位	国/地域	教育機関	教育	研究	被引用論文	産業界からの収入	国際性	総合
=22(24)	シンガポール	シンガポール国立大学	77.4	88.2	81.3	61.9	95.8	82.8
=27(29)	中国	北京大学	83.0	85.1	74.2	100.0	53.0	79.2
30(35)	中国	清華大学	80.2	93.2	71.4	99.8	41.0	79.0
40(=43)	香港	香港大学	68.8	77.9	74.2	54.0	99.5	75.1
44(49)	香港	香港科技大学	55.2	68.4	93.1	58.1	83.4	72.7
46(39)	日本	東京大学	79.5	85.2	63.7	52.7	32.2	72.2
52(54)	シンガポール	南洋理工大	49.5	63.0	90.7	94.0	95.9	70.5
58(76)	香港	香港中文大	57.0	64.4	80.6	56.8	86.6	68.5
=74(=91)	日本	京都大学	71.8	78.6	50.9	93.8	28.8	64.9
=74(=72)	韓国	ソウル大	69.3	71.2	60.6	79.8	34.1	64.9
=95(=89)	韓国	韓国科学技術院(KAIST)	56.3	59.2	70.4	100.0	35.6	60.9

\* ( )内は前回